

## 特別寄稿

## 沖縄県小児保健協会の理事を退任して —感謝と熱い思いを込めて—

公益社団法人 沖縄県小児保健協会  
名誉会長 知念正雄

### 1 はじめに

2013年3月末（平成24年度）に、1973年（昭和48年）の創立当初より関わった小児保健協会の理事を退任した。故稲福盛輝先生、山本達人先生の3人で協会設立の思いを語り合っただけで、以来40年間共に歩んできた協会に心を惹かれつつも、これまで一緒に活動してきた若い同志の皆さんに協会の未来を託す気持ちで退任することにした。この際に個人的な心境を少しだけ記しておきたくこの小文を寄稿した。

### 2 小児保健協会の創設

大学院を卒業して沖縄に帰省し、県立中部病院で臨床の仕事で忙しい3年間を過ごしていた頃に、故稲福盛輝先生から声がかかり、「渡りに船」の気持ちで小児保健協会の設立に加わった。毎日病院内を駆け回り、外来に来る子ども達の病気の治療も大事だけど、子供たちが病気になるように予防医学的仕事に関わるのも小児科医として重要な事ではないかと単純に考えていた頃であった。故稲福先生、山本先生、故仲地吉雄先生など先輩諸氏についてゆき、県庁の仲里幸子さんはじめ多くの皆さんのご支援とご協力のおかげで、今の小児保健協会が設立された。小児保健・医療・福祉・教育などに関わる多職種の皆さんが集まって、沖縄の子供のことを何でも話し合える「場」を作るのが目的であった。あれから40年が経過して協会は、多種多様な事業とその成果が県内外に評価され、広く認知されてきた。本協会の趣旨に賛同して集まった多くの同志が、積極的に事業に参加して協会を育て上げ、現在のように立派な組織に作り上げた。40年間を振り返り走馬灯のごとく思いを巡らせると、今身を引いて協会を離

れるのに一抹の寂しさがあり、後ろ髪を惹かれる思いがするのでも正直な気持ちであった。しかし若い世代の皆さんがしっかりと引き継いでゆく姿を目の当たりにしていると、理事退任に最良の時期であったと実感している。

### 3 最も印象に残ること

私にとって最も印象に残るのは、やはり1982年（昭和57年）に第29回日本小児保健学会を主催したことである。故仲地吉雄先生が第4代目の会長の任期半ばで急逝されたので、急遽押されて私が会長に就任したのであるが、そこには仲地先生が（社）日本小児保健協会本部との間で全国学会を沖縄で開催することを内諾していた事情があった。しかも仲地先生がすでに会頭講演の原稿を内々で書いている途中であったことを、後で知った。理事の皆さんが、「全面的にバックアップするから大丈夫だ、大丈夫だ」、の暗示にかかり、開業して5年目（当時45歳）の一開業医が全国学会の会頭を引き受ける羽目になったのである。それからは学会開催の準備に事務局をはじめ、理事の全員が無我夢中だった。私は自分の診療所よりも学会と会頭講演の準備のことで頭がいっぱいになり、理事会の回数は増え、夜遅くまで議論し、時には夜12時を過ぎるのも稀ではなく、協会への往復のタクシーの中で仮眠した。理事全員が熱気にあふれ、情熱に燃えていた。開催直前の台風襲来が気になったり、学会担当業者のスタッフ不足による準備の遅れにやきもきしながら、夜遅くに学会場を見て回った。当時の副会長であった原実先生に、「会長は黙って座っていなさい」と一喝されたのを覚えている。開催当日には多数の協会会員や研修医

が朝早くから駆けつけての応援があり、学会は見事に円滑に運営されたのである。1982年（昭和57年）9月30日（木）、10月1日（金）の2日間にわたり、参加人員1,663名、特別講演、会頭講演、教育講演各1題、特別演題、シンポジウム各2題、一般演題274題、を、那覇市民会館を主会場にして、ゆうな荘、那覇教育会館、那覇市教育委員会の4会場で、プログラムどおり実施され、成功裡に学会が終了し、慣れないワインで乾杯した。今から考えると不思議に思われるほど、皆が結集すれば「何事か成らざらん」を立証したのである。

学会終了後の私は、一時的ではあったが「燃え尽き症候群」のようにやや疲れを覚えたが、自分の進む方向は小児保健以外にはないと実感しつつ、昭和62年3月までの3期にわたり会長の職にいた。その後も理事として同志諸兄姉と共に小児保健活動を共にできたのはとても幸せであり、心から感謝している次第である。

#### 4 理事退任のきっかけ

長年にわたり協会事務局を一手に引き受け、小児保健協会を円滑に運営してきた現事務局長の定年に伴い、会長の指名により私が委員長として後任人事の件で委員会審議がなされた。そのころから自分自身に若干の体調不良を覚えていくらか内省的になり、70代に達した加齢による心身の疲労感が出てくるようになった、協会の改革刷新を模索するか、あるいは安定移行を目指すかにより、意見の相違がみられた。私を育ててくれた小児保健協会の健全な成長発展を願うには、まず私自身が身を捨てて考えるのが先決であろうと思われた。IT機器を十分にこなせず、時代の波に乗れない「古い人間」と自覚している。ある一定の方向が示された時点で委員会審議を終了し、私自身は身を引く決心をした。しかし同時に私自身の小児保健活動への思いは失うまい

と決意している。

#### 5 協会の今後への期待

創立以来40年が経過して、時代の変遷とともに子どもを取りまく環境も変わり、小児保健活動の課題も変化してきた。しかし一貫して変わらないものは私たちの協会が常に「子どもの側」に視点を置き、小児のアドボカシー的役割を果たしてきたことである。沖縄県小児保健協会は乳幼児健診を柱にして、時代に対応した多種多様な事業を展開し、大きな成果を上げた。この成果を県内外に発信して、高い評価と信頼を得ている。公益法人になり、ますます協会に対する期待が高まりつつある。協会役員や会員の世代交代があっても小児保健活動の目指す方向に変化はない。「子供たちのために今何ができるか、何をすべきか」を議論し、小児の代弁者としての役割を実践していただきたく思う。沖縄県小児保健協会はそのための「場」であり、「組織」である。これからも協会の会員として活動できることを誇りに思う。

#### 6 終わりに

はしか“0”プロジェクトは、2001年発足以来今日まで協会事業の一つとして認知していただき、多数の委員の協力により大きな成果を上げてきた。2010年以来県内は“はしか0”を維持してきたが、2014年に再び国内麻疹多発の傾向がみられている。これは移入麻疹の発生ではあるが、県内MRワクチン接種率がいまだに95%以下に低迷している状況からみると、今後も啓発活動を継続する必要がある。私は協会理事を退任してもこのプロジェクトの遂行維持に最大限の努力をするつもりである。協会役員の皆様はじめ、事務局の諸氏の一層のご協力、ご支援をお願いしたい。

## 特別寄稿

## ホメオパシーと予防接種

那覇市保健所

小児科医師 安藤 美恵

## 1 はじめに

ホメオパシー (homeopathy または homoeopathy とも表記) とは、18世紀末から19世紀初期にかけて サミュエル・ハーネマン (1755-1843) の唱えた臨床医学観であり、病気や症状を起こしうる薬 (や成分) を使って、その病気や症状を治す (癒す) ことができることとされ、代替医療 (alternative medicine) の一つとも言われる。ホメオパシーでは、病気と同じ症状を起こす物質を限りなく薄めた砂糖玉 (レメディ) を薬として使う。

昨今、ホメオパシー療法を積極的に取り入れている方々の一部に、予防接種を拒否される方が散見され、小児保健に携わる関係者の中の課題の一つと言われている。ホメオパシーは、本当に予防接種を否定しているのだろうか。

## 2 ハーネマンの同種療法

世界で初めての抗生物質であるペニシリンがイギリスのアレクサンダー・フレミングによって発見されたのが1928年であるから、ハーネマンがホメオパシーを提唱した時代は、疫病 (伝染病・感染症) に対する根本的な治療がないどころか、病原体という概念もなかった時代である。その時代は、天然痘、結核、コレラの流行があったとされ、原因不明の病気ほど怖いものはなく、疫病に罹ったものは呪われていると考えられ、治療方法といえば、祈祷、呪文、瀉血が主流であった。そのような時代に確立されたハーネマンのホメオパシーがどれほど人々に認知されていたのかまでは調べるのが出来なかったが、当時の野蛮な瀉血と比べたら、人々の心と体を癒しへ導いたに違いない。

ハーネマンが自ら実験として、マラリア治療薬として知られていたキナ皮を服用し、急な震えとだるさ、頻脈、発熱というマラリア様症状を呈した。マラリア様症状を起こす薬がマラリアを治す、それがホメオパシーの第一の根底原理とされる類似の法則へと繋がった<sup>1)</sup>。伴梨香氏は、類は類を治すく類似の法則の例えとして、ジェンナーの種痘について述べている<sup>1)</sup>。ということは、傷を負った後に打つ破傷風トキソイドや、麻疹患者と接触し72時間以内に緊急接種する麻しんワクチンは、まさにハーネマンが唱えた同種療法の概念と同じではないか。(ハーネマンが生きていたら、現代の予防接種についてどう思っただろうか。)

## 3 日本におけるホメオパシーの流れ

日本では、明治末期から大正にかけて、既にホメオパシーが行われていた<sup>2)</sup>。しかし、日本には漢方が取り入れられていたからか、海外におけるホメオパシーほどは浸透しなかった。日本でホメオパシーが広く知られるようになったのは、1997年由井寅子氏と永松昌泰氏が共同で、ロイヤル・アカデミー・オブ・ホメオパシー (RAH) というホメオパシー教育機関を設立した後である。その後、由井氏と永松氏は袂を分かち、永松氏はハーネマンアカデミー・オブ・ホメオパシーという別の教育機関を立ち上げた<sup>3)</sup>。それらの教育機関が設立されたのを皮切りに、ホメオパシーの教育、啓蒙、実践を行なう団体が続々と誕生した。ホメオパシー関連の出版社からは、初心者でも入りやすいホメオパシー入門書や、予防接種を否定する内容の書籍も数多く出され、日本でホメオパシーが急速に普及すると同時に、ホメオパ

シーにおいては、予防接種は毒だと認知されるようになった。

#### 4 ホメオパシーの流派・派閥

200年前に始まったホメオパシーは、現代に引き継がれる中でいくつかの流派にわかれたようだ。ハーネマンの精神を強く引き継ぎ、一つの症状に一つのレメディーのみを処方する「クラシカル派」、現代の複雑な心身の病に対応するために複数のレメディーを処方する「プラクティカル派」の二つに大きく二分される。（「ユニシスト」学派、「コンプレクシスト」学派、「プルラシスト」学派<sup>4)</sup>と分けることもあるようだ。）

実は、クラシカル派と言われる団体は元々予防接種を否定してはいない。ホメオパシーでは予防はできないと明言している。クラシカル派の代表と言われるファルカルティ・オブ・クラシカルホメオパシー・ジャパン (FCH) (旧インターナショナル・アカデミー・オブ・クラシカルホメオパシー・ジャパン；IACH) のホームページには、ホメオパシーは現代医学に取って代わる代替療法ではなく、現代医学を補完する補完療法であり、ホメオパシーは痛み止めや精神安定剤、ワクチン接種の代用といった機能は果たせない事が書かれている<sup>5)</sup>。

2009年10月、山口県でビタミンKの変わりにレメディーを与えて、乳児を死亡させる悲しい事件が起きた。被告助産師が所属する一般財団法人日本ホメオパシー財団日本ホメオパシー医学協会(JPHMA)は、“助産師は「ビタミンK 2シロップの代わりにレメディーを」と言っておりません。”と述べている<sup>6)</sup>が、同協会代表由井氏の著書「ホメオパシー的妊娠と出産」の第2章ホメオパス助産師の講演録の中には、K<sub>2</sub>シロップについて「ビタミン剤の実物の投与があまりよくないと思うので、私はレメディーにして使っています。」<sup>7)</sup>という記述がある。由井氏と袂を分かった松永昌泰氏が代表を務める日本ホメオパシー振興会は、当該事件に関して、ビタミンKの代わりにレメディーを与えたことを批判した<sup>8)</sup>。また、クラシカル派の代表といわれるインターナショナル・アカデミー・オブ・クラシカルホメオ

パシー・ジャパン (現在のファルカルティ・オブ・クラシカルホメオパシー・ジャパン；FCH) のDr.ロバート・ハシンガーも本来のホメオパシーのやり方ではないと批判した<sup>9)</sup>。一見、みんな同じような団体に見えても、考え方の違いや派閥があったのである。

Vit.K不投与死亡事件の7か月後の2010年5月に、由井氏が学長を務めていたRAHは、ホメオパシー統合医療専門校(CHhom)と名称を変え、ホームページも一新した。そのホームページには、『事実として日本ホメオパシー医学協会では、現代医療を否定してはならず、現代医療と協力してやっていくという立場をとっており、協会会員に周知徹底しています。』と書かれている<sup>10)</sup>。

現在では、クラシカル派対プラクティカル派の論争は控えめになり、どちらもハーネマンの精神を引き継いでいるとされ、代替医療(alternative medicine)とは呼ばず、現代医学を「補完」する補完医療(complementary medicine)、あるいは統合医療と呼ばれる事が主流になっている。

#### 5 予防接種を拒否する医療ネグレクトについて

上述のように、本来のホメオパシーは予防接種を否定はしていない。しかしながら、その事を知る機会も与えられないまま、ホメオパシーを実践している母親達が多く見受けられる。そのような方へはホメオパシーの流派について情報提供するだけで、ワクチン接種へ繋がる場合もある。勿論、それでも頑なに予防接種を拒否する方も居る。予防接種を否定される方々に共通するのは、現代医学に不信感を抱えているところである。不信感を与えてしまった日本の予防接種行政の歴史にも反省すべき点はある。「例え医療者がホメオパシーを否定したとしても、ホメオパシーに傾倒する人たちの根底にある現代医学への不信感・不安感は否定してはいけない。」これは、私の先輩から頂いた助言である。

イソップ童話の「北風と太陽」では、洋服を脱がせるのは太陽の方である。元々医療に不信感を持っている母親に対して、怖い顔で「予防接種受けないと危ないよ」と北風ビュービュー脅してみても、更に上着を着込むばかりであろう。上着を着込み過ぎ

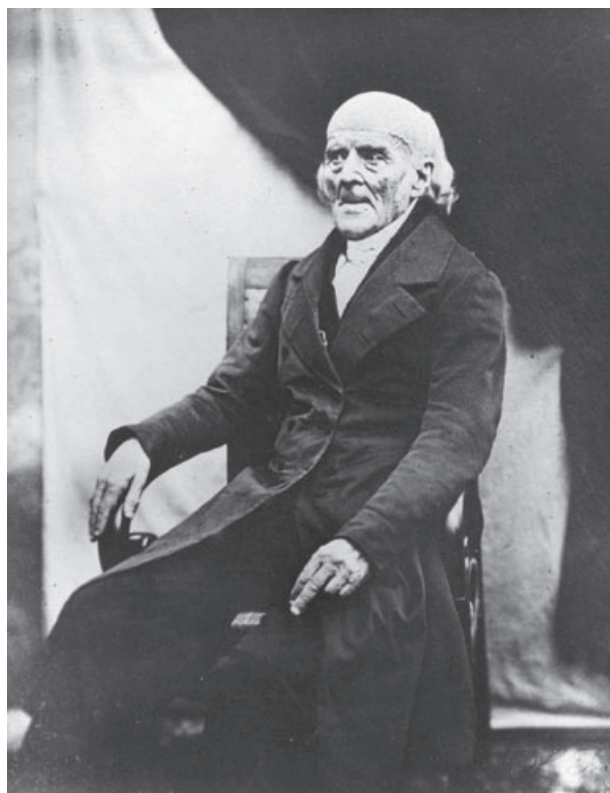
た母親には、感染症の怖さや予防接種の必要性を説いて回るよりも、医療に対する不信感や不安感に寄り添えるような太陽のような暖かさが求められるのかもしれない。

#### (引用文献)

- 1) 伴梨香. “ホメオパシー—海・森・大地の見えざる医師たち”. 新潮社, 2002
- 2) 中村裕恵. “ホメオパシー セルフケア BOOK”. 新星出版, 2003, p48
- 3) “ハーネマンアカデミー松永学長のひとりごと”. ハーネマンアカデミー・オブ・ホメオパシー. [http://www.hahnemann-academy.com/blog/2008/04/post\\_2.html](http://www.hahnemann-academy.com/blog/2008/04/post_2.html), (参照2015-02-25)
- 4) 帯津良一.” ホメオパシー—補完・代替医療”. 金芳堂, 2007
- 5) “病気に対する考え方”. クラシカルホメオパシー概要. ファルカルティ・オブ・クラシカル・ホメオパシージャパン. <http://www.fchom.com/homeopathy/index.html#h3-04>, (参照2015-02-25)
- 6) “平成22年 8月 5日 創刊 ホメオパシー新聞 (号外)”. 一般財団法人日本ホメオパシー財団日本ホメオパシー医学協会. [http://jphma.org/About\\_homoe/jphma\\_answer\\_20101222.html](http://jphma.org/About_homoe/jphma_answer_20101222.html), (参照2015-02-25)
- 7) 由井寅子. “ホメオパシー的妊娠と出産—自然出産をサポートする36レメディー (由井寅子のホメオパシーガイドブック 2)”. ホメオパシー出版, 2007, p67-69
- 8) “ホメオパシーに関連する医療過誤のニュー

スについて”. 日本ホメオパシー振興会. [http://nihon-homeopathy.net/semi-info/comment\\_2010\\_07\\_09.htm](http://nihon-homeopathy.net/semi-info/comment_2010_07_09.htm), (参照2015-02-25)

- 9) “ホメオパシーの一連の報道につきまして”. 「ホメオパシー」—ニュースで攻撃を受けている自然療法. ファルカルティ・オブ・クラシカル・ホメオパシージャパン. <http://www.fchom.com/homeopathy/news.html>, (参照2015-02-25)
- 10) “医師法と薬事法について”. 一般財団法人日本ホメオパシー財団認定ホメオパシー統合医療専門学校. <http://www.homoeopathy.ac/2012/faq/faq.html#c01>, (参照2015-02-25)



Dr Samuel Hahnemann